

まつわる生活史へと関心を向けていた（三浦徹「追悼文 佐藤次高先生」『史学雑誌』120-6（2011年6月）、1154-1156頁）。そうした中で著者はあえて「下部構造」に踏み込んでこれに挑み、本書という大きな成果を上げたのである。本書が打ち出した、ワクフ制度を軸とする「マムルーク体制」論は、今後のマムルーク朝研究の新たなスタンダードとなるであろうし、西洋史や日本史、中国史など他領域との比較研究にも十分な基盤を提供する。幅広い層の読者が本書を手に取り、マムルーク朝史研究の最新の成果を摘み取ってもらえればと願う。

（刀水書房、2011年1月刊、A5判、348頁、7000円）

書評

立石洋子『国民統合と歴史学

—スターリン期ソ連における

『国民史』論争—

中 嶋 毅

本書は、主に1930年代から50年代にかけてのスターリン時代のソ連における統一的な歴史教科書の作成過程とその内容、および歴史教科書における歴史評価をめぐる論争の変遷を分析することを通じて、ソ連の「国民史」形成とそれに基づく「国民統合」の試みのもつ歴史的意義を実証的に考察した著作である。社会主義国家を標榜したソ連は、マルクス・レーニン主義という特異な理念に立脚して国家建設を進める一方で、世界的な国民国家システムの中で疑似国民国家として国民統合の必要にも迫られた。それゆえソ連の歴史学は、インターナショナリズムを奉ずるマルクス主義の理念に基づく歴史叙述と「国民史」の構築を通じた国民統合の要請という方向性の異なる2つの課題を同時に追求しなければならなかった。こうした問題意識に立って本書は、上記の課題を通じてソ連史学史とソ連政治史とを統合して新たなソ連国家像を提示しようと試みた意欲的な研究である。

本書は、研究史を整理し課題を設定した序章と時系列に沿って叙述される7つの章、全体を総括した終章の全9章から構成されている。序章では、とく

に史料公開の進んだベレストロイカ以降を中心とする先行研究の批判的検討に基づいて、ロシア史と非ロシア諸民族史との相互関係を解明する必要性と、共産党・政府指導部の政策だけでなく歴史家内部の議論に着目する必要性が強調される。そこから著者は、ロシア史を含む諸民族・諸地域の歴史と総体としてのソ連史像の関連を解明し、党・政府指導部の対応と歴史家の議論との相互作用を明らかにすることを、本書の具体的な課題として設定する。

1920年代を対象とした第一章は、ソ連初期の歴史学の状況を概観しており、本論の叙述の前史として位置づけられる。ここでは、十月革命後も非マルクス主義歴史家が研究教育活動を継続したことや、のちに活躍するマルクス主義歴史家もその指導下で歴史家としての訓練を受けたことが強調される。こうして著者は、本論が対象とする1930年代以降の歴史家集団が複合的構成を有していた点に着目し、スターリン時代の政治と歴史との関係を多面的に理解する必要性を指摘する。

1920年代末～30年代前半を検討した第二章から1950年代初頭までを叙述した第七章までが、本書の本論である。歴史教育の改革は1930年代初頭の教育システム改革の一環として始まったが、その際、史的唯物論に基づく歴史解釈と史実の理解に資する歴史叙述を調和させた新たな歴史教科書の作成が求められた。この過程で、「ブルジョア歴史家」と呼ばれた、革命前から活動していた実証的歴史家の影響力が次第に再評価されるようになった（第二章）。歴史教科書のなかでも特に重視された初等教育用の教科書の作成に向けて教科書コンクールが実施され、1937年にはロシア国家の強化を再評価する標準教科書が採択された。この教科書はまた、ロシアによる非ロシア諸民族地域の支配と他国による当該地域支配を比較して前者を「より小さな悪」として肯定的に描写したが、この概念の適用については地域により微妙な差異がみられた。また、歴史教科書作成の過程でポクロフスキー史学に対する公的批判が広く国民に示されるとともに、これと軌を一にして「ブルジョア歴史学」の批判的摂取が進められた（第三章）。

1930年代末の国際情勢の緊迫化のなかで作成され

た中等・高等教育用教科書では、ナポレオン戦争をはじめとする歴史上の「外敵」との戦いを全国民の戦争とする描写が次第に顕著になった。非ロシア諸民族とロシアとの相互関係は「階級」「民族」「宗教」の3要素の選択的利用によって説明され、非ロシア諸民族史上の出来事や人物の描写には否定的要素のみならず肯定的要素も取り入れられており、ロシアによる諸地域の支配の評価についてはいまだ統一の見解は形成されていなかった(第四章)。独ソ戦の開始により、歴史学分野でもロシア愛国主義の要素が強まったが、それと同時に非ロシア諸民族の戦争への動員の必要性という観点から、民族的アイデンティティに訴える歴史描写が広く利用された。この2つの方向は互いに矛盾する要素をはらんでいたが、この時点では明確な公式見解は示されなかった(第五章)。

ロシア史と諸民族史との関係に変化の兆しが現れたのは、戦局が大きく転換した1944年半ば以降から第二次世界大戦後の東西両陣営の対立に至る過程においてであった。戦後のソ連による諸民族地域の再統合という課題のもとで、民族的アイデンティティを鼓舞する戦時中の民族史研究に対する揺れ戻し現象が生じ、諸民族の「民族主義的歴史観」が批判の対象とされた。それと同時に、諸民族地域に対するロシアの支配は進歩的なものとして肯定的に評価されるようになった(第六章)。さらにスターリン時代最末期の1948年以降、非ロシア諸民族史の叙述は大きく変化し、対ロシア反乱を指導した諸民族の「英雄」に対する否定的評価が支配的となった。1950年以降にはイデオロギー的統制がさらに強化され、歴史学の領域で論争的であったテーマについても公式見解が定式化された。こうして歴史学に対する政治の介入が最高度に高まり、歴史学と政治との関係は質的に変化した(第七章)。

そして終章で著者は、以上のような検討結果をいま一度確認し、ソ連における歴史学と政治との相互関係の変遷とその歴史的意義についての考察をふまえて、ソ連における「国民史」形成の経験が歴史学および歴史教育一般に多くの示唆を与えると論じる。

本書が対象とした時代のソ連歴史学の動向については多くの研究が関心を寄せていたが、従来の研究

では、一貫した方針に立った政治指導部により歴史学に対する政治的統制が一方向的に強化されたという単線的な見方が強く、本書が考察対象として設定した「国民史」形成やそれに基づく「国民統合」と歴史学との関係についてはほとんど検討されてこなかった。これに対して本書は、「国民史」を求める共産党・国家指導部の一般的方針に対応して実際に歴史を叙述する歴史家集団の動向を丹念に跡づけて、時に党・国家指導部の公式見解をめぐって論争をも引き起こした歴史家集団の主体的動向を析出し、ソ連における歴史学と政治との関係が時代状況のなかで複雑に変化する過程を具体的に描き出すことに成功した。この点に本書の最大の特色がある。

また本書は、ソ連における歴史家集団の多様性に着目することで、歴史家と政治体制との相互関係の複雑な様相を照らし出した。ソ連における知識人を対象とした歴史研究のなかでは、従来から世代間の対抗関係の存在が指摘されていたが、本書はそれにとどまらない歴史家間の錯綜した関係にも踏み込んでおり、このような複合的性格をもつ歴史家集団がさまざまな回路を用いて党・政治指導部に接触しつつ歴史を叙述したことを本書は明らかにした。歴史家という知識人集団を対象とした本書は、ソ連知識人論としても興味深い事例を提示しており、この点も本書の大きな特色である。

本書が提示した新たな知見は多岐にわたるが、ここでは評者の関心に基づいて3つの論点を本書の貢献として指摘しておこう。第一に本書は、ソ連の歴史教科書の記述、とくにロシア歴代皇帝の評価や諸民族の対ロシア反乱の指導者に対する評価が、対外的要因によって大きく左右されたことを明らかにした。1934年からの歴史教育改革がドイツ歴史学への対抗を契機としていたこと、独ソ戦の開始がロシアによる帝国支配の評価に影響を及ぼしたこと、第二次世界大戦後の歴史叙述の転換が「西洋跪拝」批判やソ連を取り巻く国際関係の悪化によりもたらされたことなどを、一次史料の分析を通じて説得的に示したことは、本書の成果の一つである。

第二に、「より小さな悪」概念の適用範囲をめぐる歴史家たちの論争を丹念に分析することを通じて、本書は、ソ連体制による国家統合の変容過程を検討

し、第二次世界大戦後に国家統合の強化傾向がみられたことを実証的に示した。また本書は、この問題を検討しながら歴史学に対する政治的圧力の昂進の過程を明らかにしており、その主張は、1930年代にソ連の歴史学に対する政治的圧力が一挙に高まったとする通説の見解に大幅な修正を迫るものとなっている。この点に関連して著者は、1930年代のいわゆる「ポクロフスキー批判」をソ連の歴史研究・歴史教育全体に向けられた批判にとらえ、その意義を再検討して、国民統合と「国民史」形成にとって不都合な歴史理解の代表的存在としてこの時期に「ポクロフスキー理論」に対する攻撃がおこなわれたと主張する。著者のこの主張は、歴史理論・史学方法論に対する政治的圧力の強化の代表例として「ポクロフスキー批判」を位置づける従来の見解では十分に解明できなかった側面に新たな光を当てる視点を提示している。

第三に、独ソ戦末期の1944年に開催された歴史学会議とその後の動向を丹念に分析することで、本書は、当該期に至っても歴史家間には歴史叙述をめぐる統一の見解が存在しておらず、党・政府指導部の公式見解も示されていなかったことを明らかにした。著者は、この歴史家会議をうけて共産党指導部が歴史学に関する公式決定の作成を試みながらもそれが中断された過程を考察し、この事実がロシアによる国家統合を肯定的に評価しようとする共産党指導部内の新たな傾向を示すのではないかという仮説を提起する。戦争末期から戦後にかけてのソ連国家の再統合という政治指導部にとっての重要課題に鑑みれば、まさにこの時期に政治指導部内に自国史認識の転換が生じたとする著者の仮説は重要な問題提起である。

一方で本書が提示した上記の知見は、同時に新たな疑問を呼び起こす契機にもなっているように評者には思われる。第一に、自国史認識における対外的要因の重要性は著者が強調するところだが、このことが逆に歴史評価の変化に及ぼした国内的要因の相対的な軽視につながっているのではなからうか。著者が指摘するように歴史教育の最初の変化は1934年頃から見られたが、同年1月には第17回共産党大会が開催されており、この大会は社会主義建設の基本

路線が勝利したことを確認した「勝利者の大会」として知られる大会であった。この大会を転機とする新たな土台に立った国家統合路線に向かう動きと歴史教育の変化との関係がどのようなものであったのかという問題は、個別の検討対象とする必要があろう。

この点に関連して第二に、1938年刊の『全連邦共産党（ポリシェヴィキ）歴史小教程』が与えた影響について著者は、本書が共産党史を対象としないという理由からこれに意識的に触れていない（19, 121, 133頁）。しかし著者自身も指摘するように、同書の刊行は共産党史のみならず歴史学・歴史教育さらには社会科学全般のドグマ化を昂進する起点となったのである。『小教程』が歴史教科書叙述にいかなる影響を与えたのか（与えなかったのか）という問題を実証的に検討することは確かに困難な課題であるが、本書が歴史叙述の方法を直接の対象とした以上、この問題にもしかるべき言及がなされてよいように思う。

第三に、本来はソ連体制とは相容れないとされた「ブルジョア歴史家」が政治体制の必要性から復権する一方、「ポクロフスキー批判」から1930年代後半のいわゆる「大テロル」の時期にマルクス主義歴史家に対する厳しい批判と抑圧が展開されるという一見逆説的な構図を提示したのは本書の大きな功績であるが、ソ連における知識人と政治体制との関係という観点から見た場合、この「逆説」をどのように説明すればよいのであろうか。もっとも本書はこの問題を正面から取り上げたものではなく、この疑問も評者自身の関心に基づくものなので、これは本書の成果を踏まえた上で検討しなければならないソ連知識人論研究の今後の課題である。

全体として本書の叙述は、未公刊文書を含む一次史料の博搜とその丁寧な分析に裏づけられて、説得的なものとなっている。前史にあたる第1章の叙述はやや図式的な印象を与えかねず、本論中にももう少し議論を深めてほしいと思われるような箇所もなくはないものの、史料の利用と論旨の展開という点で本書の叙述はおおむねバランスの取れたものといえる。歴史学と政治との関係に新たな視角から光を
(64頁へ続く)

(58頁より続く)

当てて、わが国のロシア現代史研究の空白を埋めた研究として、また1930年代後半以降のいわゆる「盛期スターリン時代」についての初めての本格的実証研究として、本書は当該領域での今後の研究の出発点となる著作といえよう。

本書はまた、他国の歴史教育と比較しうる多様な

素材を提供することにより、各国の「国民史」を歴史的に考察する上で考慮すべきさまざまな問題も提起している。この点で本書は、ソ連史の個別事例研究にとどまらない比較研究の可能性を大きく開いており、このことも本書の魅力の一つである。

(学術出版会〔日本図書センター発売〕、2011年11月刊、A5判、340頁、4800円)

2013年2月、調査を兼ねて冬の北海道に出かけた。旭川までバスで足をのばしたときに、深川市の雪原を通った。

以前に深川に来た時は暑い夏の日だった。親しかった林宥一氏が北海道で自転車旅行をした際に急逝し、林氏の故郷の深川であった葬儀に出かけたのである。

林氏の死後に3冊の遺著が編まれた。林氏が勤めていた金沢大学の友人たちが編んだ『銀輪』には、1990年代における林氏の大事な軌跡が2つ刻まれている。金沢大学平和問題ネットワークをつくり、『ネットワーク・ニュース』を発刊して学内の議論を喚起したこと。もう1つは、金沢大学生協の『アカンサス Review』

に3年間、書評を書き続けたことである。

林氏が描いた2つの軌跡は、大学内で公共的な場を自主的につくる試みだった。法人化後のいまの大学では、この試みは大変難しく思える。そのことを含めて誰かと話したかったが、林氏の葬儀と一緒に参列した安田浩氏ももういない。

晩年の林氏は、「地域的公共関係」の史的追究と、大学内に足場をつくる試みをともに進めていた。雪原を走るバスのなかで林氏を思い出しながら、歴史にかかわるものとして、いまの大学でも足場を築く方法は何かあるのではないかと考え続けていた。(大門)

2012年度歴史学研究会委員

【委員長】 池 享 【編集長】 大門正克 【事務局長】 小野 将
 【古代史】 阿部 衛 服部一隆 平澤加奈子 堀内淳一 【中世史】 唐沢晃一 菊池 浩幸 下村周太郎
 竹井英文 花房 秀一 【近世史】 小田真裕 小原 正 五味知子 仲松 優子 仲丸英起 牧原成征
 村 和明 山本英貴 若尾 政希 【近代史】 青山 治世 大澤 広晃 太田 亮吾 小川 輝光 上田 誠二
 小島 庸平 佐々木 紳 藤野 裕子 松原 宏之 山口 昭彦 吉岡 拓 【現代史】 姉川 雄大 宇田川幸大
 河野 正 白川 耕一 鄭 栄桓 土肥 歩 【事務局】 増田 純江 (編集) 中村 孝子

・本誌上で寄稿者の責任において述べられた意見および事実の説明は、歴史学研究会としての見解を示すものではありません。
 ・本誌掲載の書評および史料・文献紹介の図書の価格は、本体価格となっています。